

躍動 YAKUDO

第24号 平成16年8月1日

編集・発行/財 新潟市体育協会
新潟市一番堀通町3の1
電話 266-8250
FAX 266-8332
印刷所/共立印刷株式会社
新潟市近江2-16-15
電話 285-2711代



〔さる3月の全国高校選抜大会重量挙げ女子69kg級で自己タイのトータル162.5キロで優勝した〕
塚麻美奈選手(新潟西高)＝詳細はトピックス掲載

「優しき乙女は力持ち」 —高校全国大会(リフティング)で二階級制覇—



国体を目指し 地元選手を育てよう

財団法人 新潟市体育協会
副会長 藤田純 二

一昨年、新潟から発信したワールドカップサッカー開幕戦、以来市民のスポーツ観が大きく変化したような感じがいたします。さる七月三日のビッグスワンでのJリーグオールスター戦を始め、J1に昇格したアルビレックス新潟やバスケットボールのスーパーリーグを地元ホームで観戦、日本のトップレベルの力と技を直接ハダに感じるようになりました。熱い声援が自然と沸き上がるのも当然で、すばらしいことだと思っています。

この八月にはアテネオリンピックが始まります。前回のシドニーでは、マラソンの高橋尚子選手の優勝や水泳で本県の中村真衣選手、女子ソフトボールなど女子選手の大活躍が話題を提供しましたが、アテネではどんな感動のドラマが待っているのでしょうか、今から楽しみでワクワクしています。

さて、五年後の二〇〇九年(平成二十一年)、二巡目新潟国体の開催が内定、各市町村の開催種目も決定いたしました。これから本格的な準備が進むものと思いますが、国体を盛り上げる一番の妙薬は、本市からより多くの選手が輩出され活躍することです。そのためにも、皆さんが取り掛かっている重点施策のジュニア選手強化を、各種目の独自性を生かして、一歩でも二歩でも前進する具体的な成果を期待しています。

そして、関係機関など連携をより密にしてお互いの考え知恵を出し合って、成功のゴールに向かって頑張りましょう。

新潟市では、来年三月二十一日に近隣十二市町村との広域合併を目指しています。新潟市体育協会も各市町村体育協会との連絡調整会議で情報交換を図ると共に、将来を展望した体協の姿を協議しているところです。

おわりに、この五年後の国体が皆さんの力で歴史の一ページを飾るよう期待してあいさついたします。

'09、二巡目新潟国体の競技会場決まる

新潟市の開催競技合併後は11種目

感激の新潟国体が、45年ぶりの2009年（平成21年）、再び「第64回国民体育大会」として還ってくる。戦後、疲弊しきっていた日本国民に勇気を与えた国民体育大会、大会の性格も時代と共に少しずつ変わりつつあるが、唯一国内の最大総合スポーツイベントであることには変わりはない。

国民体育大会は、通常冬、夏、秋季と開かれ、その総合成績で競う都道府県対抗戦の全国大会。

しかし第19回新潟国体（1964年）だけは秋に東京オリンピック開催の関係で変則の春季大会となった。

この新潟国体で、開催県が東京都以外で初めて天皇、皇后両杯の総合優勝を飾ったことは画期的な出来事だった。以来開催県が連続して総合優勝をさらったことで、開催県の選手強化策のやり方に批判が高まり、一時「国体廃止」の声も聞かれた。また時代とともに問題が噴出、スポーツの多様化や、参加者のマンモス化、それに伴う華美に走る開催県の経費増大など…、国体運営全体の簡素化が重要テーマにもなった。それで抜本対策として参加者の15%削減、夏、秋季の一本化が検討され、2006年（平成18年）の第61回兵庫大会から実施する運びとなった。5年後の二巡目新潟国体も、夏、秋季一本化の第64回国民体育大会、同大会冬季大会の名称で開催される予定。

本県でも公開競技も含め、冬季を合わせて40競技（スケート競技以外）、会場が決定していない馬術をのぞき、現時点は46市町村（これから市町村合併で数が変更）の開催地も決定、予定している手続きも終って、さる6月4日正式に新潟県知事、同教育委員会、同体育協会会長の連署で、日本体育協会会長、文部科学大臣へ国体開催

申請をした。この7月6日に開催地内定。なお、最終決定は開催3年前の平成18年9月までには決定される。

40年前の昭和39年の新潟国体を振り返ると、当時は冬季（スケートを除く）、春季、夏季が予定され、公開競技（山岳）を含めて競技種目は32競技だった。しかし夏季大会が地震のため中止。結局は31競技で終わった。今度の二巡目国体は、アーチェリー、空手道、銃剣道、なぎなた、ボウリング、ゴルフ、冬季大会でもモーグルやバイアスロンなどが加わって40種目（うち公開競技＝高校野球硬式、バイアスロン）と規模も一回り大きくなった。

5年後に迫った県および各競技会場の市町村でも、今年に入って、本格的に国体準備に動きはじめた。

開閉会式が行われるメイン会場新潟スタジアムの新潟市でも、4月1日から市体育課内に国体準備室を設置、来年度は同準備委員会を発足して、万全な準備に取り掛かる予定。

ところで現時点新潟市で行う競技は8競技、市町村合併後は11競技となる。

来年3月21日、新潟市を中心に近隣12市町村（新津市、白根市、豊栄市、小須戸町、横越町、亀田町、西川町、岩室村、味方村、湯東村、月潟村、中之口村＝3市4町5村）が新潟市と合併。人口78万人の都市として日本海側初の政令指定都市を目指す“新・新潟市”が誕生する。それに合せて合併する市町村の体育協会も6月に初顔合わせ、各市町村の現状、問題点など話し合った。7月には再度会合をもって調整を図り、体協組織の一本化を推進、と同時に国体準備へ一層弾みをつけることになった。

このほど決まった新潟市で行われる競技種目、会場は下記の通り。

◇第64回国民体育大会、新潟市の各競技種目と会場◇

競技名	種目別	市町村名	会場名
陸上競技	開・閉会式 陸上競技全種目	新潟市	○新潟スタジアム
サッカー	少年男子	同上	○新潟スタジアム ○県立鳥屋野潟公園多目的運動広場 ○市陸上競技場 ○市鳥屋野運動公園球技場
バスケットボール	少年男子 少年女子	同上	○市東総合スポーツセンター ○市鳥屋野総合体育館 ○市西総合スポーツセンター ○市北地区スポーツセンター ○市体育館
セーリング	全種目	同上	○市西港入舟地区特設セーリング会場（仮称）
ソフトテニス	成年男女	同上	○市庭球場
ライフル射撃	C P	同上	○県警察学校
ボウリング	全種目	同上	○新潟交通(株)シルバーボウル ○新潟ミナミボウル
高等学校野球	硬式	同上	○県立野球場（仮称） ○市鳥屋野運動公園野球場

◇来春新潟市へ合併する市町村の競技種目と会場◇

競技名	種目別	市町村名	会場名
バスケットボール	成年女子	横越町・亀田町	○横越町総合体育館 ○亀田町総合体育館
レスリング	全種目	白根市	○白根市カルチャーセンター
柔道	全種目	豊栄市	○豊栄市総合体育館
弓道	近 遠 的	新津市	○新津地域学園弓道場 ○新津地域学園特設遠的会場（仮称）

来年3月、13市町村体協が統合

～一本化で国体準備に拍車～

来年3月21日に新潟市と近隣の市町村が合併。日本海側最大78万人の政令指定都市を目指す新・新潟市が誕生する。

それに伴い各市町村の体育協会と新潟市体育協会の組織一本化に調整が着々進められている。それで来年合併で新しく加入される各市町村体育協会の現況を簡単にまとめてみました。

新津市体育協会

昭和25年（1950年）8月1日に設立。翌年県体育協会へも加盟した。

現在は24競技団体、小中高体連の3団体、それにスポーツ少年団を合わせると28団体（会員数約11,000人）で構成。また160社に及ぶ賛助会員の協力と支援で市民のスポーツ活動を支えている。

各加盟団体も青少年のスポーツ活動を奨励するため積極的に「青少年スポーツ教室」を開設、各種スポーツの審判指導者の講習会も合わせて開き、体育振興のための指導者養成にも力を入れている。



〔ジュニアソフトテニス教室〕

また同協会では毎年12月にスポーツ振興大会を開催、優秀選手の表彰、記念講演など文化活動を通し、市民のスポーツ高揚も図っている。

このほか二巡目国体の弓道競技会場に決定。指導者育成、ジュニアの競技向上に取り組んでいる。

豊栄市体育協会

昭和36年（1961年）8月15日設立。

現在20競技団体、スポーツ少年団、中高校体育連盟合計23団体（会員数約2,000人）が加盟している。

協会主催の3大事業は、福島潟駅伝競走大会、豊栄マラソン大会、市民総合体育大会。加盟団体が一致協力、大会を盛り上げている。この事業には車椅子の障害者も健常者と一緒に競技に参加、地域密着のスポーツ活動を展開している。その活動が全国的にも評価され市制功労賞や、社会体育の優良団体として大臣表彰も受賞された。

加盟団体でもバスケットボールが盛んで、木崎中、光



〔第23回豊栄マラソン大会（車いすの部）〕

晴中が全国トップクラス。全国大会では上位の成績で注目されている。

また沖縄空手の一つ糸道（たいどう）が盛んで、会員数100人を擁し、全国大会、世界選手権大会では常に上位を独占している。

このほか社会の変化に対応した住民スポーツを、市とも協力、スポーツ活動、文化活動の振興を目的とした総合型地域スポーツクラブ育成を推進、平成15年に特定非営利活動法人「ハピスカとよさか」を設立した。これからは行政と連携を密にして地域スポーツ振興の活性化を図る。

小須戸町体育協会

協会設立は古く、昭和25年（1950年）7団体で発足、現在は11団体（会員数426人）が加盟している。

昭和39年の新潟国体以後、町にもスポーツ振興の気運が高まり、体育施設の充実に力を入れるようになった。

町民体育館（昭和45年）を皮切りに野球場とナイター



〔ジュニアの表彰式〕

設備、総合スポーツ公園の新設、柔剣道場などが出来る
と、町民のスポーツに対する関心も高まり、町教委主催
の柔道、剣道大会は恒例事業として48回を数えるよう
になった。また昭和48年（1973年）に開催した町民参加
のマラソン大会も23年間（平成8年）続いた。

町内のスポーツ人口が拡大されると、協会の組織力も
広がり、ママさんバレーボール、ソフトテニス、水泳や
野球の町民ナイターリーグなどが企画されスポーツ活動
拡大にも繋がった。

また協会では青少年の健全育成を図るため、スポーツ
少年団の指導育成にも力を入れ、町内の企業からの寄付
を募り、その基金が少年団育成事業に生かされている。

岩室村体育協会

昭和44年（1969年）に設立、現在25団体（会員数1,000
人）が加盟している。

協会の主な事業は、村最大の村民体育祭で、村と共催
で実施している。体育祭期間中は協会傘下の加盟団体の
会員を総動員、村あげて盛り上げに協力している。

このほか協会の行事としては、「村民歩け歩け大会」、
「春季少年野球大会」、「親子ソフトボール大会」、「男女
混合バレーボール大会」「村民バスケットボール大会」
「親子ドッジボール大会」「7人制混合ソフトバレーボ
ール大会」などスポーツを通じて村民融和を図り、明るい
村づくりに役立っている。

また青年団活動のスポーツ大会には、協会も積極的に
協力、協会傘下のバスケット、軟式野球、婦人バレー
ボールなど各クラブも参加して、他地域青年団対抗大会
ではかなりの実績を残している。さらに協会では社会体
育の一環として村立小中学校の学校開放を利用、村民が
何時でもスポーツが出来る環境作りも手伝っている。

西川町体育協会

昭和47年（1972年）12月3日加盟8団体で発足した。

現在は17団体が加盟し、会員も総勢541名。

協会の事業として、元旦マラソン大会、近郷中学校男
子バスケットボール大会、同女子バスケットボール大会、
近郷婦人バレーボール大会、町民ハイキング、体育協会
長杯争奪空手道大会、少年少女わんぱく相撲大会、少年
野球大会、町民スキー教室などが主な恒例の事業。この
ほか8月の夏祭り「西川まつり」には体協も民謡流しに
参加、祭りを盛り上げている。

今後協会では地域のスポーツ発展と国体を視野に入れ
たジュニア選手育成にも力を入れる。

潟東村体育協会

昭和48年（1973年）7月29日に設立総会を経て、体育
協会を発足した。

発足当時は加盟団体は陸上競技、野球、バレーボール
の3団体（会員100人）だったが、現在は13団体（会員
405人）と所帯が増えた。

協会は村から受託事業として、村民野球大会、ソフト
バレーボール大会、近郷バスケットボール大会、バレー
ボール大会を開催している。また各種スポーツ教室や体
験ウィークといって協会傘下の各団体活動に村民も参加
して親睦融和を図っている。

少子化傾向は協会加盟の団体にも深刻な問題で、指導
者不足とジュニアの育成は、今後協会の重点課題。

月潟村体育協会

昭和58年（1983年）5月9日加盟7団体をもって協会
を設立した。現在10団体（会員438人）で構成。昨年は
20周年を迎えた。これを機会に各団体もジュニア育成に
取り組み始めた。

白根市体育協会・横越町体育協会・亀田町体育協会・
味方村体育協会・中之口村体育協会は次号に掲載。

今年度新潟市体協予算決まる —ジュニア強化助成金もとに復活—

平成16年度新潟市体育協会理事会、評議員会は4月22日開かれ、前年度事業報告、収支決算報告の後、16年
度施策方針と事業計画それに伴う新年度予算を原案通り決めた。

今年度の予算は、厳しい財政事情から前年度同様緊縮財政となった。
今回、基本財産の外国債運用益が、変動により増益が見込まれ、若干
持ち直しつつあるものの、まだまだ日本経済も不安定？から、運用益
を次年度運用資金へ充当することとなった。

さらに方針として新規賛助会員拡大を図り、財政基盤安定に一層努
力することとなった。

二巡目国体も迫り、将来を背負うジュニア選手育成を重点に、前年度
予算ではジュニア強化助成金5%減を、今年度はもとの水準に復活した。

なお16年度予算額は前年度より336万円増の2,846万円となった。





◆競技種目は18種目に決定

組織委員会は発足直後から難問に直面した。まず東京大会は何種目の競技を実施するのか、またメインスタジアムをどこにするのか、さしずめ早急に決めなければならない。種目についてはいろいろの議論のなかで、日本に馴染めない競技のほか、まだ競技団体の結成も不十分な競技は取り止める。例えばフェンシング、近代五種競技、カヌー、重量挙げ、射撃などがあげられた。とくにフェンシングと近代五種競技は東京大会から除外する方針を決定した。フェンシングの代わりに、日本は剣道を新しく種目に加えることを、I O C に働きかけていた。しかしヨーロッパのI O C 委員から反対され、日本の思惑どおりにはいかなかった。

1937年6月に行われたワルシャワのI O C 総会は、それらの日本問題に終始した。前回のベルリン大会と同じように、日本がオリンピックを純粋なスポーツ競技から離れ、政治的に利用しようと目論んでいると各国I O C 委員は日本を警戒し、けん(牽)制していた。そして鋭い各国I O C 委員の集中質問に、答弁に立った副島委員も返答に窮し、たじろぐ場面もあった。そのつどラツールI O C 会長が、懸命に東京の肩をもち、擁護したおかげでなんとか難局を乗り切った。

結局、この総会で確認された競技種目は、陸上、ボクシング、自転車、馬術、フェンシング、体操、近代五種競技、ボート、射撃、水泳、重量挙げ、レスリング、ヨット、芸術競技、サッカー、水球、ホッケー、バスケットボールの18種目の競技と、オープン種目として武道と野球が採用された。

そして東京大会の会期は、1940年8月の最終週から9月第1週と決定された。また1940年の冬季オリンピックも夏季大会開催国が十分な保証があれば、当時のオリンピック憲章の規定により、札幌が開催地に選定された。

メインスタジアムの決定についても議論百出、組織委員会では1937年2月23日神宮外苑競技場を、改造して充てることでようやく決着した。

これは政府にオリンピック補助金500万円の支出を要求する急場の事務的処置でもあった。

◆東京大会にはテレビ中継

競技施設の準備のほかに、東京大会ではテレビ放送の研究も進められていた。当時日本のテレビ研究は、機械式と全電子式の2派に分かれていた。現在のテレビの前身である全電子式を採用していた浜松高工の高柳健次郎助教授が、1926年ブラウン管を用いて「イ」の字の映像受信に成功した。1936年8月日本放送協会は、すでに浜松高工の教授に昇格していた高柳に依頼、東京オリンピックのテレビ中継を実施することを決めた。そして高柳教授に放送協会の技術研究所に移ってもらい、同教授を中心とした本格的なテレビジョン本放送

研究に着手した。

計画では国産初のテレビ受信機、受像機を使って中継放送をする方針で進めていた。しかし現在のような全家庭にテレビ受像機が普及している時代ではなかった。ほとんどの国民は、まだテレビの存在さえ知らない時代であった。そのうえ技術面の大量生産は不可能なため、東京管内約40ヵ所、大阪管内30ヵ所、名古屋管内20ヵ所に公衆受像機を設置して、国民に最大限オリンピックを観戦してもらおう計画だった。

また前回のベルリン大会で、大会のクライマックスを飾った聖火リレーについても、東京大会では古代の旧道である西欧と東洋を貫く陸上の商路、シルク・ロードを聖火コースに考えた遠大な計画があった。それはギリシャからテヘラン、カブールを経て、インドのデリー、カルカッタ、中国に入り広東、天津、瀋陽を経由、韓国のソウル、そして日本に上陸、下関、大阪、名古屋、そして東京という15,000キロの聖火大距離リレーを決行する計画だった。

これについては陸軍も非常に乗り気で、その経費として100万円を援助することになっていた。なぜ陸軍参謀が聖火リレーに興味を示したかは、スパイルートとして役立つと見ていたらしい。しかし軍全体の考えは、次第にオリンピック反対の意向に傾いていった。

◆陸軍「馬術準備中止」の波紋

1937年7月7日、日中戦争の導火線となった蘆溝橋事件が勃発した。この戦争の発端は、北京郊外の名勝蘆溝橋付近で、日本軍の一個中隊が演習中、数発の銃声が響き、日本兵の一人が行方不明になった。

この事件の1ヵ月前、近衛文磨を首班とする第一次近衛内閣が発足した。この内閣が軍部の後押しで中国の華北派兵を決定、局地戦争から日中全面戦争へと拡大する引き金となってしまった。ずるずると戦火は北京、天津へと広がり、8月13日上海でも日中両軍が衝突、宣戦布告のない事変として以後、8年間泥沼の殺りく(戮)戦争へと継続することになった。

この日中戦争がオリンピック東京大会中止への最初の赤信号だった。

陸軍省はこのオリンピック東京大会での馬術競技は、ロサンゼルス大会金メダリスト西竹一選手、ベルリン大会代表岩橋学選手の両騎兵大尉ら7人を候補選手としてすでに決定していたが、8月25日「馬術準備中止」を発表した。ようするに「時局の拡大により現役将校を、オリンピックの準備訓練に専念させる余裕がなくなった。陸軍所属の選手を引き上げる」というわけだ。

この陸軍省の発表をきっかけに、以後戦火拡大によって戦争を集中遂行のため、軍部はオリンピック反対の軌道修正に切り換え、組織委員会や東京市になにかとカサに着的圧力を仕掛けてきた。

このころから新聞やスポーツ関係者から「東京オリンピック返上」の声がささやかれるようになった。

8月26日付「都新聞」(現在の東京新聞)に副島I O C 委員の談話が次のように掲載された。

「時局はどこまで拡大するのか、戦局の発展如何ではオリンピックそのものを考えねばならないと思う。オリンピックを返還するかどうかは、今のうちに決めなければならない。この際だから、政府も率直な意向を示してほしい。そしてオリンピック開催に政府が不賛成なら東京大会の取り消しも止むを得ない」

このようにオリンピック関係者から公式に語られたのは初

めてだった。

日本ではこの東京大会を巡って混乱が深刻になっていたさなか、近代オリンピックの創設者クーベルタン男爵が、9月2日スイスのジュネーブの公園を散策中急死した。74歳だった。

◆天皇の開会宣言問題



日本陸連第3代会長(1965)
河野 一郎

陸軍の準備中止決定を敏感に反応した人物がいた。当時、国会議員で政友会の河野一郎代議士であった。彼は早大陸上競技部出身で神奈川県陸上競技協会会長を務めており、オリンピック返上論の急先鋒だった。1937年 8月30日、彼が所属する同協会において緊急役員会を招集、すぐに東京大会の中止を決議させて、オリンピック返上の具体的な行動を開始した。

河野は、この年の 3月20日の衆議院予算委員会でも一触即発の国際情勢においてオリンピック大会開催は不可能ではないのかと、政府を鋭く追及したことがあった。そのとき政府はオリンピック開催続行を言明したが、この東京オリンピック開催に関連して、河野が「オリンピック憲章に基づいて天皇が開会宣言するのは、日本の国情から考え不可能ではないのか」と質問したことがあった。この質問は国情の意になかった辛らつ？な質問だった。当時I O Cのオリンピック憲章では、「君主または主催者が競技大会の開会を宣言されるよう要請する」となっている。日本では天

皇がその役割を担うことになるが、天皇は現人神（あらひとがみ）で「神聖不可侵」とされた時代だけに、はたして宣言にお立ちになることが可能なのか？大いに疑問のあるところだった。戦前は天皇が公の場で、お言葉を述べられることは考えられなかった。ましてやマイクでお言葉を一などは不敬とみなされていた。

戦前は天皇のお言葉やラジオからもお声は聞いたことはなかった。国民が初めて昭和天皇のお声を耳にしたのは、1945年 8月15日、暑い終戦の日、玉音という詔勅放送が初めてだった。

事実差迫る時局のさなか政府は、天皇の宣言云々など考える余裕はなかったと思う。このときも後日の宿題として先送りの答弁で終わっている。

9月6日河野は衆議院予算委員会で、この非常時のさなかオリンピック開催は不可能だと、再度オリンピック中止論を唱え政府に迫った。この時近衛首相、杉山陸相は、関係団体と協議のうえ態度を決定すると答え、政府首脳としてオリンピック返上をにおわせ、そろそろ引き際を模索し始めていた。

しかし翌7日の新聞紙上の風間章書記官長談話が、東京オリンピックを中止する旨の記事が掲載され、後に書記官長談話は「誤って伝えられた」と取り消したが、携わるスポーツ関係者の間では大きなショックだった。

ところでオリンピック中止の急先鋒、河野一郎は戦後、1964年（昭和39年）第18回オリンピック東京大会の担当国務大臣に就任、持ち前の実力政治家として本領を発揮、オリンピック開催準備の先頭に立った。あれから27年の歳月は、神様の悪戯か？、不思議な回り合わせとなった。

〈次号に続く〉

トピックス

オリンピック発祥の地ギリシャでのアテネオリンピックがいよいよ秒読み段階に入った。派遣する各競技の日本選手も決まり、最終調整に入っているが、本番では“体操日本”のホープ本県出身の中野大輔選手に注目している。また、県内でも二巡目新潟国体が、5年後を迎え、市町村の競技会場も決まり、準備体制がスタートを切った。本格的なスポーツシーズンを迎え本県、市出身選手の話も盛り沢山、今年前半の話題を拾ってみました。

●…男子体操のオリンピック候補は、選考会で18人に絞られ、さる5月2、3日に行われた最終選考の第43回NHK杯大会で代表6人が選ばれた。

本県出身の中野大輔選手（新潟上山中－九州共立大）と佐野友治選手（新潟江南高－徳州会）がこの大会に代表を賭けて挑んだ。

1日目中野選手が12位と出遅れたが、最終日巻き返して7位となり、種目別ポイントで平行棒で9.700、鉄棒で9.650と高得点を出し、逆転して五輪の切符を手にした。佐野選手は初日、最終日ともに6位と健闘したものの、種目別ポイントで1点及ばず惜しくも代表から外れた。

本県出身の男子体操のオリンピック代表は、メキシコ、ミュンヘン、モントリオールと出場、金メダル8個を獲得した加藤沢男選手（新潟南高－筑波大）以来で、本番での中野選手の活躍が期待される。

●…さる3月30日、東京代々木第一体育館で行われたミニバスケットボール全国大会で、本市の男子ミニバスケットチーム「丸山バッドボーイズ」がブロックで優勝した。



〔市長に優勝報告する〕
丸山バッドボーイズ

この大会は男女各48チームが出場、予選リーグで勝ち抜いた16チームが4ブロックに分かれて決勝トーナメントで覇権を競った。丸山チームは決勝トーナメント1回戦で滋賀の「長小キング」と対戦、前半5点リードされていたが、後半粘って追いつき、延長のすえ1点差の接戦で決勝へ進出、決勝でも余勢を駆って愛知「美川MBC」チームを66-50で下し優勝を飾った。

●…本市の新潟西高3年の堺 麻美奈さんが、今年3月28日香川県多度津工高体育館で行われた全国高校選抜大会重量挙げ競技(ウエイトリフティング)女子の部69^キ級で、トータル162.5^キ。(スナッチ72.5^キ、ジャーク90^キ)



〔堺麻美奈選手・コーチの高橋雅朝先生〕

を挙げて優勝、さらに7月19日富山県滑川市総合体育センターで開催されたインターハイに代わる全国高校女子ウエイトリフティング選手権大会でも、上級の75^キ級に挑戦、トータル165^キ。(スナッチ72.5^キ、ジャーク92.5^キ)で優勝、見事に2階級制覇を果たした。

同選手は中学校(坂井輪中)のときは陸上の砲丸投げをしていたが、新潟西高へ進学の際に現在の同校の体育指導している高橋雅朝教諭(松之山出身)に勧められ重量挙げへ変更した。

高橋教諭は1976年のオリンピック、モントリオール大会で重量挙げ52^キ級男子日本代表選手。同大会ではメダルは逃したが堂々の4位。国内の全日本選手権大会では6回も優勝を飾った輝かしい履歴の持ち主。引退後郷里へ――。

高校教師として新潟西高への赴任は8年前。この競技の普及と後進の指導にあたっている。

しかし本県高校の重量挙げの状況は、3校(新潟工、新潟西、県央工)のみ。同校の部員も8名うち女子は2名というのが実情、高橋教諭の指導もあって孤立奮闘、さる6月20日の北信越高校大会では同競技女子69^キ級に出場した堺選手がトータル160^キ。(スナッチ72.5^キ=大会新、ジャーク87.5^キ)で優勝、同僚の男子も85^キ級の山崎直希選手がトータル242.5^キ。(スナッチ112.5^キ=大会新、ジャーク130^キ)、77^キ級の布川 誠選手もトータル227.5^キ。(スナッチ102.5^キ、ジャーク125^キ)さらに69^キ級の池田達也選手もトータル210^キ。(スナッチ90^キ、ジャーク120^キ)とトリオが揃って優勝に花を添えた。

●…昨年暮れ、サッカーJ2優勝で待望のJ1昇格を決めたアルビレックス新潟、今年J1のステージ前半は、地元の熱い期待も空しく3勝7敗5分け14位で終わった。J2とは違ってJ1はチームの力、実力共に1枚も2枚も上だったことを痛感した。

J1初戦のF東京戦は、動きに堅さがみられ前半25分に1点を入れられたものの、後半徐々にペースを掴み脅かす場面もあったが、得点に繋がらずに終わった。ここで選手達もJ1で戦える感触は得たかに見えた。

しかし試合が進む4節以降、上位チームに当たると、力の差は否めない。4月10日のホーム戦での横浜M、5月9日の同じくホームの浦和戦、前半最終15節の6月26日ホームのG大阪戦は、J1リーグの実力差をまざまざと見せ付けられた。

後半の第2ステージは8月14日から始まるが、アルビレックスの課題は、地元新潟サポーターの熱い後押しをホーム戦にまず1勝、以後その勢いでホーム戦は落とさ

ないことが肝心だろう。そしてJ1に生き残りを賭けた戦略で戦ってほしいものだ。

●…今年の3月に行われた全日本テコンド・ジュニア選手権大会で新潟高志高2年の鈴木慶太選手(17歳=力心館所属)が、高校男子ライト級で5対2の成績で圧勝し連覇した。また6月4日の全日本テコンド選手権大会でも8強入りを果たし世界選手権大会日本代表選手に選ばれた。

同選手は中学生のとき、中学生以上で54^キ以下の体重であれば誰でも出場できる全日本新人選手権に挑戦。全国172人の参加選手中、ただ1人中学生選手で出場した。この試合1回戦で高校生を破り、2回戦では大学選手と互角に渡り合ったが0対1で惜敗、全国から注目された。

高校進学でさらに磨きをかけ、今年6月12日韓国・スイチョン市で2年ごとに開かれる世界ジュニア・テコンド選手権大会に世界初デビューを果たした。

しかし今回の大会は世界86カ国から参加、鈴木選手はライト級(43カ国参加)で出場、1回戦はシードされ、2回戦から南米ガテマラの選手と対戦、9対10の僅少差で破れた。世界へ羽ばたく鈴木選手にはほろ苦いスタートになったが、若い同選手、これからチャンスは幾らでもある。挫けることなくチャレンジして欲しい。



〔鈴木慶太選手〕

●…スポーツの役割概念が変わるなかで、将来の新潟市の「スポーツ振興はどうあるべきか」市民と一緒に考えようと同市教育委員会など主催で「スポーツフォーラム in にいがた」が、さる3月14日新潟市の市民プラザで開催された。

フォーラムは、新しいスポーツの概念を研究しているスポーツクリニック内科医師の辻秀一氏(エミネクロスマディカルセンター長、日本体協公認スポーツドクター)の基調講演のあと、市教委の諮問を受けてスポーツ振興審議会により今後十年先を見据えた「新潟市スポーツ振興基本計画案」の中間報告が行われた。

計画案は「スポ柳都にいがた」をテーマに「健康」「競技」「観る」「支える」の4つの視点から提案、市民が健康で豊かな人生を送るためスポーツ環境を整備し、一層の充実を目標に作成する。将来の展望としては社会資源のネットワークで、スポーツクラブを創設、地域スポーツを皆で育成支援をする。総合的にスポーツ文化を醸成し、「楽しいスポーツ」を新潟市民が平等に共有するのが目標。

この計画案は16年度中に答申。それを基に17年度以降、市教委が計画を策定する方針。



〔将来を見据えたフォーラム〕

今秋9月、ビッグスワンで 全日本実業団陸上選手権

今年の初秋、新潟にビッグな全国大会、「52回全日本実業団対抗陸上競技選手権大会」が9月25、26両日新潟スタジアムで開催される。

オリンピック後、初めて日本のトップアスリートが新潟の競技場で一堂に会し、競う大会だけに注目される。

種目は男子一般、同オープンで23種目、女子が一般、オープンで21種目。合計44種目の陸上競技で競われる。この大会は原則としてタイムレースで、出場資格は各地区の予選会3位以内と厳しい。昨年の実績からして各地区の陸上連盟傘下の400チーム、男女850選手の参加が予定され、実業団所属のオリンピック選手や人気選手、オープン参加の外国選手も多数参加が予想され、新潟ではメッタ（減多）に観られないトップアスリートの久しい全国大会である。

平成15年度 県体協スポーツ功労者表彰



▶ 松山 正男 (75)

新潟市水泳協会副会長

県内各地の小学校で水泳指導に専任、とくに水泳理論と実技で講師を務め、水泳普及と競技力向上に尽力、指導者として貢献、成果を上げた。また新潟市水泳協会のシンクローの育成にも多大な足跡を残した。



▶ 宮川 忠和 (64)

新潟市バドミントン協会顧問

県バドミントン協会の草創期、選手、監督などを経て、1977年（昭和52年）に理事長に就任。その後、日本リーグの開催や国際試合の誘致、さらに全国規模の「新潟社会人バドミントンリーグ戦」を立ち上げるなど、県バドミントン界向上に貢献した。



▶ 池野 洋世 (63)

新潟市陸上競技協会強化副部長

1962年（昭和37年）中学校教員になって以来、中学校陸上競技の指導者一筋、多数の優秀選手の育成に尽力。とくに昭和60年度（1985年）インターハイ陸上男子走幅跳び1位になった小林義治選手（新潟高校）、平成4年度（1992年）19回全中の陸上競技2年女子100m競争で2位の西山敦子選手（山潟中学）など幾多のジュニア選手育成に貢献した。

◆ 訃 報 ◆

本市体協関係に貢献した下記先輩たちが今春他界された。紙面をもって哀心からお悔やみ申し上げます。

◇ 若杉元喜さん (85)

今年6月10日死去。昭和58年新潟市長に当選後、「福祉の若杉」として平成2年まで、市長2期、市体協会長4期をつとめた。在職中は鳥屋野総合体育館の武道館、西総合スポーツセンターに屋内ゲートボール場を建設、生涯スポーツ普及にも力を入れた。また昭和63年国際大会の第9回アジア卓球選手権を誘致したり、将来の本県スポーツ振興のため「県体協スポーツ振興基金」を街頭で呼び掛けるなど、市民スポーツ普及振興に力を注いだ。

◇ 堀 保利さん (96)

今年3月2日死去。旧新潟中学（現新潟高校）時代いろいろなスポーツの全国大会に出場。体操との出会いは新潟師範からで、昭和7年教員当時、全日本選手権大会に出場。以後幼児、児童期から基礎体操の訓練や基礎普及に尽力した。また、県体操協会会長、市体育協会副会長顧問として本県の体操競技及び市民スポーツ振興に貢献した。

◇ 中山 仁さん (84)

今年4月26日死去。東京高師時代では全日本体操選手権総合3位になったが、昭和15年幻となった東京オリンピックの代表候補選手にもなった。戦後、郷里新潟へ戻っても、新潟クラブリーダーとして昭和22年の第2回国体に初出場。以来通算10回の出場を果たし、「体操新潟」の黄金時代を築いた。昭和32年選手生活にピリオド後、新潟大教育学部教授のほか、新潟市スポーツ振興審議会会長、県体操協会会長など歴任。

編集 後記

この8月（11日～29日＝13日開会式、29日閉会式）世界最大のスポーツイベント第28回オリンピック大会が、一世紀を経て発祥の地ギリシャ・アテネへ再び還ってくる。

“近代オリンピックの父”フランスのクーベルタン男爵がオリンピック復活を提唱、1896年4月5日アテネで、その第1回オリンピック大会を開催した。

しかしクーベルタンが描いていた目指す理想のオリンピックは、簡単なものではなかった。

荒削りのオリンピックを理想の姿へクーベルタンは努力して修正に奔走した。アマチュア資格、競技規則でトラブルに対立するときはセント・ポール寺院の司教が「オリンピックで重要なことは勝つことではなく参加することである」と説教。この文言に感動した彼は、のちにオリンピックの理想の言葉として採用。崩れかけたオリンピック哲学の原理を修正？五大陸をイメージした青、黄、黒、緑、赤の五輪のマークの旗も設定、精悍な精神のオリンピック理念を構築、何とか一世紀支えてきた。

オリンピックが復活してちょうど30周年目の1925年、IOC会長を続けていたクーベルタンは引退、スイスのジュネーブに余生を送りながら、亡くなるまでオブザーバーとしてオリンピックを支援した。

彼が死の1年前、1963年ヒットラーがオリンピックを最大限利用したという第11回ベルリン大会の閉会式に、蓄音機に録音した彼の声が競技場に響き渡った。世界から鍛え選ばれた精鋭、アスリートたちが「より速く」「より高く」「より強く」を求め、ナイト（騎士）の心でファインプレーで競う。これこそ究極のオリビズムと原点を説いた。これが彼のオリンピック関係者へ贈った最後のメッセージだった。しかしクーベルタンの心の深層は、世界平和を願う切実な訴えだったのではなかったか？…。戦争（テロ）の影に、つねに揺れ動くオリンピック、現在にも通じる世情を彼は透視していたのかも知れない。

現在遺骸は、IOC本部に近いスイス・ローザンヌの共同墓地に埋葬されているが、彼の遺言に従って遺体の心臓は、アテネの古代オリンピックの遺跡にほど近いクロノスの丘に建てられたオリンピック記念碑の台座の中で静かに眠っている。（S）